「キリスト教世界の不思議現象　第３弾　聖痕について
～奇跡的出来事が起きる意味とは～　」　岩田明子

今回の夏期特別セミナーのお話をいただいたときに、「不思議なものとの出会い」と「共時性理論」という、この二つのテーマで、私が何かお話できるとすれば、自分の専門分野である「心身相関論」のテーマがわかりやすくて面白いのではないか、と思いました。

わたしはドイツ留学中に、心身医学という分野に出会い、キリスト教のカトリック教会が定義するところの「奇跡的治癒」という概念をめぐって「祈りが治癒に及ぼす影響」について研究していたことがあります。

通常の医学が、病気の原因を追究してそれを取り除くという還元論的なアプローチをするのに対して、心身医学は心と体の一致を説きます。心の状態が体にも現れますし、体の状態が心にもたらす影響もあります。この心と体の意味のある一致は、まさに「共時性現象」ということができるでしょう。このテーマでお話しを進めようと思っていたところ、そういった医療関係のテーマよりも、これまで私が発表してきた「キリスト教」関連の話が期待されていることが途中でわかり、改めてテーマを考え直すことにしました。

これまで、私が発表させていただいたのは、1回目が、ユングも興味を抱いて研究していた「マリア信仰」についてです。聖書にあまり登場しないマリアに対する信仰がなぜ生まれたのかなど、歴史的な推移をご紹介しながら、マリア出現と民衆の間で根強いマリア信仰の関係、１９５０年に正式に教義として宣言された「マリア被昇天の祝日」の背後にある女性性の問題についてもお話させていただきました。キリスト教の三位一体（父と子と聖霊）から、第四の要素として、女性・肉体・悪を加えた四位一体へと移行していくヨーロッパ世界の心理的構造を、ユングがどのように考えていたのか『ヨブ記への答え』をご紹介しながら説明しました。

第 2 回目の発表内容は、カトリックの準秘跡である「エクソシスト」の内容と位置づけについてでした。なぜ現在ヨーロッパでエクソシストの復興の兆しがみられるのかなど、ユングの『アイオーン』を参考にしながら、ヨーロッパの現状、キリスト教と悪の問題について心理学的な視点からお話ししました。

そして今回、「キリスト教世界」「共時性」そして、できれば「心と体の相関関係」をテーマにした不思議な現象はないものか？と頭をひねりました。

そして、「キリスト教の世界における不思議現象　第３弾」ということで思いついたのが、「聖痕」という現象でした。

「聖痕」というのは「スティグマ」とも呼ばれ、キリスト磔刑のときと同じ傷が、時代と場所を超えて、肉体の同じ場所に現れるという現象のことを言います。カトリック教会はこれを「奇跡」、つまり「神の介入」という解釈をしています。

歴史上の人物としては、世界的に有名なアッシジの聖フランチェスコ、カトリックの教会博士という称号をもつシエナのカタリナ、そして現在カトリック教徒のあいだでは最も話題になっている聖ピオ神父が、この聖痕現象を体験しています。

神の介入という言葉は、どちらかというと神の側が主導権を握って入ってくるというニュアンスが強いのですが、それを受け取る側にまったくその意図はなかったのでしょうか？　受け取る側に見られる共通点を考えてみました。

聖痕を体験した方たちの内面では、当然のことながら、信仰内容が共通しています。まず、聖書にしるされている人間観です。聖書の創造神話には「神は人間を神の似姿（Imitatio Dei）として創造された」という内容があります。さらに、キリスト教における信仰は、キリストに倣う（Imitatio Cristi）ことです。

修道院では信仰を深めるために、キリストの生涯を観想するという務めがあります。自分とキリストの関係を深めていくことが信仰を深めることになるのです。そのときに信仰者は、時代も場所も異なるイエスが生きた現実をイメージすることになります。

また、聖痕現象の根拠となるものが、一方的な神の介入というだけではなく、このイメージの強度や臨場感が、このスティグマという不思議な現象と関係があるのではないか、人間の側の心の状態にも関連があるのではないかということが、次の話からもわかります。

聖痕という現象は 13 世紀ごろから始まったといわれているのですが、このころからキリスト教美術の世界で、キリストの磔刑についての様子が美術作品として流布し始めたということが大きく影響していると言う説を唱える方がおられます。

さらに美術作品においては、釘がイエスの掌に打たれていたため、聖痕は同じように掌に現れる場合が多かったのですが、その後、実際には釘がイエスの「手首」に打たれたのではないかという説が有力になると、聖痕の傷が「手首」に現れる人が増えたという現象があります。これは、聖痕現象が、それを受ける側のイメージ力にも左右されているのではないかという推論を可能にします。

いずれにしても、信仰の世界と共時性の世界は無関係だという見方が根強くある一方で、こうした信仰上の奇跡といわれている現象の多くが、実は共時性現象として説明がつくものが多いのではないか、と私は思っています。

そこで今回は、聖痕という不思議な現象もまた、共時性現象として説明できるのではないかという問題定義をさせていただいたわけです。

ここには、意味におけるカテゴリーの一致があり、理性では説明でいない時空を超えた現象がみられるからです。

またこの現象の面白さは、相互に異なる次元にあると思われていた心と体（物質）に、両者をつなぐような要素があるということ、つまり、物質にも心的な要素があり、心にも物質的な要素があり、それが相互に働きかけ合うことができる世界があるということが垣間見られるという点です。

いわゆる心身相関論の基礎にあるものは、心のなかでの出来事と、心とは本来無縁であるとされている肉体の症状（物質界の出来事）の非因果律的な一致です。それは、物質的な出来事も、それ自体に心の出来事を含んでいて、またその逆もありうるということを意味しています。そうであれば、聖痕現象もまた、共時的な現象として見ることができるのではないか‥‥。

もちろんこのことは物理的に証明できないので、問題定義にとどめるしかないのですが、それにしてもマリア様の出現、悪魔祓いという儀式、そして今回ご紹介した聖痕現象。信仰の世界には不思議な出来事が多々起きるものです。
ところが、こうした不思議な現象がもっている意味は、信仰上の問題、キリスト教の教義の問題にとどまりません。こうした不思議現象は、私たちの認識を超えたところに、別のリアリティーがあるということ、そして時空を超えて、いくつかの情報が何らかの形で相互作用している可能性があることを教えてくれているからです。

個々人の意識の拡大が、人類の進化につながるということを考えるとき、不思議な現象は、実は人類の進化を促進するための起爆剤の役割を果たしてはいないでしょうか？
「自然は生ける一冊の書物だ」といったのはゲーテですが、こういった不思議現象が読み解かれるたびに、「自然という書物」が読み解かれていくように私には思えるのです。

ユングの生涯を見ていくと、彼は、自分の周囲に起きる不思議な出来事を自然の摂理の一部であると考えたに違いないということがわかります。ユングの共時性理論は、彼が不思議な現象に向き合い、自然の摂理を読み解きたいと願い、自分の意識を拡大したレベルに応じて得られた理論です。そうである限り、この理論は逆に、ユングの意識レベルに達していない私たちの意識拡大に貢献してくれる可能性があるということになるでしょう。

私たちの理性を超える現象をすべて「神の奇跡」としてしまっては、私たちの意識レベルでの拡大は期待できません。共時性という思想レベルでの新しい方程式によって、不思議現象を解き明かしていくプロセスにおいて、異なる次元の扉が開かれ、私たちの意識が拡大されるという点に、ユングの共時性理論の最大の功績があるのではないか。そんなことを考えながら、このテーマを選ばせていただきました。